

『中国の石窟に於ける』

仏塔の表現について』

坂 輪 宣 敬

中国の石窟遺跡は現在三十有余を数えることが出来るがそれらのうち、規模が大きくて資料に富み、学術的な価値の高いものは、甘肅敦煌の千仏洞、大同の雲崗石窟、河南洛陽の龍門石窟の三窟であろう。他では甘肅の麥積山石窟、同じく甘肅の安西万仏洞、河南の天龍山、河北の響堂山などの石窟が窟数も多く著名であるが、規模は上記三石窟に比べてかなり小さい。

本論では敦煌、雲崗、龍門の三石窟の仏塔の表現について、^①法華経との関連を注意しつつ比較考察したい。

漢訳妙法華経では塔という言葉の他に塔廟という言葉がかなり多く使用されている。(法華経では「塔」「七宝塔」「塔廟」の四種の使用頻度が高い。)しかしこれは、

ストウーバ(舍利を奉安する)と、チャイトヤ(制多、塔又は仏像を有する窟院)とを区別しているわけではないようである。

魏書釈老志に「塔はまた胡言にして猶ほ宗廟の如きなり、故に世に塔廟と称す。……世人相承けて之を浮図となす、晋世洛中浮図四十二所あり。」のごとく、一組の塔と寺を指し、また目につき易い塔を以て寺院を代表させていると考えるのが妥当であろう。

インドに於ても、かなり早くから塔、制多、僧院が一組となつて伽藍を形成していたことが明らかである。^②

次に敦煌、雲崗、龍門三石窟中の塔に關して、(一)塔廟窟、(二)覆鉢塔(舍利塔)、(三)多層塔、(四)多宝塔、の四種の区分を立てて論をすすめたいと思う。法華経の塔の表現は、A過去諸仏般涅槃後、舍利供養のための塔(圖に表すとすればおそらく覆鉢塔。)B二仏並座の多宝塔。C法身仏供養のための塔。Dその他仏道を成ずるため、又は仏の供養のための塔など。の四種に分類することが出来る。さきの拙考による区分は、この法華経の分類を準用しようとする。

したものに他ならない。

(一)塔廟窟。インドのチャイトヤ・グリハの系統を引く塔廟窟が、敦煌、雲崗に少なからず見出される。ただし龍門には一例もみられない。敦煌の塔廟窟は、四面に龕を有する中央方柱に変化し、塔の形態をとるものは殆んどない。

北魏窟(一〇五、一一八M窟)、隋窟(一三六窟)から初唐窟までみられ、中唐以降の窟には方柱窟は存在しない。

中央に仏台(基壇)のみあって、その上に仏像を立てる窟(一三七D窟)が、これはインド式チャイトヤの塔が方柱からさらに仏台に変化したものと考えられ、塔の中国化の一典型と云えよう。塔廟窟の中国化のもう一つの例は雲崗にみられる(一、二、四、六、三九洞)。これらの窟内の中央の塔は、石造でありながら木造の塔の形を瓦、椽、四注、三つ斗、又手束など細部に至るまで模倣している。

龍門より時代の古い雲崗、また時代の下る天龍山(八洞)、響堂山(一、二洞)、また北魏から初唐に至る敦煌などにみられるにもかかわらず、龍門に塔廟窟の存しないのはなぜであろうか。洛陽遷都を敢行したタクバツ族の一

属の親中国化政策の影響とも思われるが、中国の石窟が塔廟窟中心から仏像中心に変化しつつある趨勢のもとで、塔は国家的な庇護をうけて、洛陽の城内外に大規模に造建され、ために洛陽に近い龍門の塔廟窟はその存在の意義を失ったものと考えることが妥当であろう。魏書釈老志の伝える永寧寺、層の豪華な有様や、洛陽伽藍記の記述からも、そのような推定が可能と思われる。

(二)、覆鉢塔(舍利塔)。インドのサンチー大塔などの系統を引く塔で、一または二重の基壇の上に覆鉢を置き、その上に相輪部を有することを特徴とする。

敦煌に於ては極めて小さな形で多数描かれるが、独立した覆鉢塔はみられない。北魏窟(一三五窟)の例は薩埵那本生図といわれ、覆鉢塔の前に舍利を描き、この塔が舍利塔であることを示している。

雲崗、龍門ともに覆鉢塔は非常に少い。

(三)多層塔。敦煌には独立した三層以上の多層塔は一例もない。一一七窟(宋以降)の如く、壁画中に小さく表わされるものはいくつか数えられよう。龍門には一三窟、一四

窟など洞外に木造を模した石造のもの五個がみられる。雲崗はA梯子状の簡易なもの、B木造を模したものの二種の多層塔（三、五、七、九層のもの）が多数みられる。浮彫のものは主要な仏龕が区切るかのように表わされ、丸彫のものは四基集って方柱を形成し、窟頂を支えたりしている。A類とB類は同じ窟内にあることもあり、両者を時代的に区分することは出来ない。

A類の塔は覆鉢を挟んで両側に大きなバルメットを持つ。これは後に変化して承花となるが、インドの塔にはみられず、ガンダーラの塔にみられることと、バルメット文様がエジプト、ギリシヤに淵源をもつことから考えて、塔とバルメットはガンダーラに於て結合したものと云えよう。A類の塔にはバルメットの間から童子形の人物が顔をのぞかせたり、バルメットの先端に幡が結ばれていたり（六洞）、などの表現が注意される。なお、B類の塔にも相輪上部に幡のある例（一一洞）がある。これらの幡はガンダーラの諸塔にもみられる。法華玄讚に「即ち塔の覆鉢柱頭に於て幡を懸く」という説明もあり、かなり一般的に

行われたものであることが知られる。

四、多宝塔。法華経による塔の形容のうち（これらは必ずしも全て多宝塔に關してではないが）、高さと縦広の比率は序品二・五倍、授記品二倍、宝塔品二倍、提婆品一・五倍となり、一定の意味のある値を示しているように思われる。摩訶僧祇律^④は「高さ一由延、面広半由延、銅をして欄楯を作る」とあって、やはり比率は二倍である。この法華経による比率はガンダーラ塔に於てほぼ満足されるが、龕室、欄楯などは法華経の記述と合致せず、なお今後の考究に待たねばならない。サンチー大塔が○・四七倍で高さと縦広の比率が逆になっていることからみて、それよりもかなり時代の下のことが考えられる。

石窟中の多宝塔は雲崗、龍門両石窟とも二仏並座の造像はきわめて多数存するが、法華経の説相では理解出来ない場合が多い。これに対して敦煌には、明らかに法華経に基づいた二仏並座の多宝塔（龕）がみられる。中でも法華経変相の壁画に表わされる、木造平屋造りの建物に二仏の在す図相は、嚴密には塔とは云えないが、浄土關係経変の影

響によるものと思われ、さわめて興味深いものがある。

- ① 石窟の文献としては、常書鴻『敦煌壁画』、P. Pelliot『Les Grottes de Touen-houang』、水野、長広共著『龍門石窟』、水野、長広、塚本共著『龍門石窟の研究』。
- ② 高田修、上野照夫共著『インド美術』
- ③ 正藏三四卷。
- ④ 正藏二二卷。

元政上人著書の一考察

——特に伝記類について——

丹 治 智 義

高僧伝は仏教の盛衰消長を知る上に欠く事のできない資料の一つである。

日蓮宗に於けるかかる僧伝としては、六牙日潮の本化別頭仏祖統紀が、「該書の宗門史に貢献せるは、本朝高僧伝並に元亨釈書等の本邦仏教史上に於けるが如し」⁽¹⁾とか、

「日潮は宗史学の上に不朽の業績を残した」⁽²⁾等と言われて高く評価されている。確かに、広汎な資料を蒐集し、それを一定の組織に纏めた功績は実に大なるものである。

本稿では、日蓮宗関係の伝記数でこの別頭統紀には到底及ばないが、広く宗門内外にわたる僧伝を残した元政著述の伝記書について触れてみたい。

元政の伝記書としては、本朝法華伝、扶桑隱逸伝、龍華歴代師承伝があり、又、艸山集の中にも記載されている。

そこで、これらの著述について概観すると、本朝法華伝は法華経の弘伝に関する事項を記述したもので、発願、転読、持誦、講讀、書写、聴聞等十科に分ち、主として平安期迄の諸宗の僧九十四人を収録している。この書は、巻頭に「唐祥公法華伝行乎世也久矣本朝之伝吾不_レ得_レ而見_レ之矣」⁽³⁾とあり、本邦に於ける法華伝が未だ著述されていない為に著わされたものである。

次に扶桑隱逸伝は文徳天皇の朝（A・D・八五〇〜八五六）より大永年間（一一五二〜一一五二八）に至る迄の隱遁僧七十五人についての行状を記したものである。これは元